ときの玉手箱

～彦根城博物館からのメッセージ～

第347回

鹿図　鄭培筆　～家老からの贈り物～

享保十六年（一七三一）、中国・清の画家沈南蘋が来日し、長崎に滞在して画を描きました。精緻で写実的な表現と華麗な色彩、豊かな装飾性を得意とする画風は日本画壇に新鮮な驚きをもって迎え入れられ、十八世紀から十九世紀の日本画壇に多大なる影響を与えました。後に南蘋派と称される、直接的な影響を受けて同様の画風で描く者だけでなく、既存の諸画派の絵師たちもこぞって南蘋風の画を描いています。

鄭培（生没年不詳）は、沈南蘋に随行したと伝わる弟子の一人。南蘋は、享保十八年までの一度きりの来日でしたが、鄭培は再度来日したことが分かっています。

本図は、松樹のもと、雌雄の鹿が描かれています。松は複雑に曲がりくねり、地面はその一枝と呼応するように水辺に向かって傾斜する構図となっています。

華やかな色彩ではないものの、細密な鹿の毛並や樹皮の表現など、対象に迫ろうとする南蘋風の特色が見て取れます。鹿は寿命を司る寿老人の乗り物で、「禄」（給与の意味）と音が通じることから、背後の常緑の松、下方の長寿薬とされる霊芝とともに瑞祥の意味があります。つまり、本図は吉祥に満ちあふれた画と言えます。

この画が制作されて凡そ百年を経た弘化二年（一八四五）の十月、彦根藩井伊家十二代直亮（一七九四～一八五〇）は、参勤交代で江戸に向かうために彦根を出立しました。出立前に、筆頭家老である木俣守易（一七九八～一八五六）が、お慰みのためにと、直亮に献上したのがこの画でした。

守易は、江戸で活躍した有力詩人、菊池五山とも交流のある、楽山、石香斎などの雅号を持つ文化人でした。藩主直亮は書画骨董類に並々ならぬ関心を示していて、その収集に熱心でした。近くにいた守易は、それをよく知っていた故に画を献上したのでしょう。画の選定にあたっては、直亮の趣向を意識しただけでなく、献上品にふさわしい吉祥画ということもポイントとなったのではないでしょうか。

【彦根城博物館学芸員　髙木文恵】

鹿図　鄭培筆　当館蔵

鹿図は、常設展示で令和7年2月2日（日）まで展示します（12月25日（水）～31日（火）は休館）。